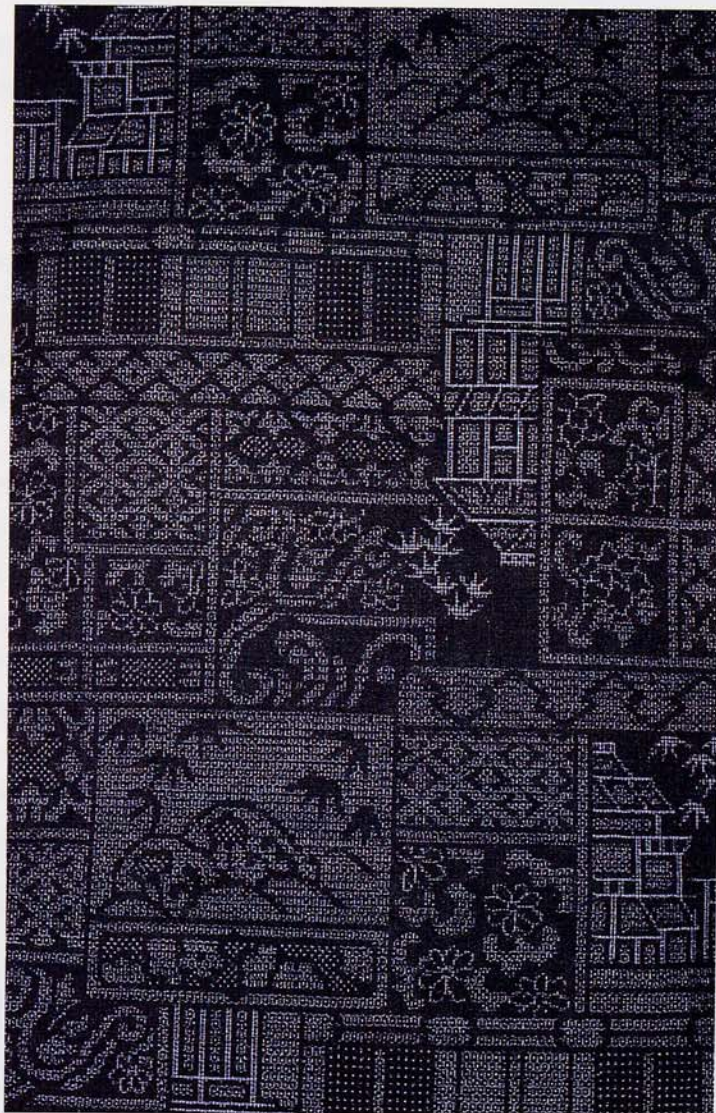


博物館だより

No. 16

秋季特別展「結城紬—地機で織る(Ⅱ)—」
平成5年10月23日(土)~11月23日(火)



21 結城紬百亀甲細工拵反物

一宮市博物館はこれまで地方伝統織物を紹介してきており、また一宮地方は、茨城県結城地方から伝えられたという「結城縞」等の縞木綿生産で著名でした。

本特別展は、「伝統織物」・「結城縞のルーツを求めて」シリーズの一環として、結城紬の縞や拵の技術とその工芸美を中心に59点を展示構成するもので、重要無形文化財の手業の素晴らしさを心行くまでご鑑賞くだされば幸いです。この特別展に際し結城市・本場結城紬卸商協同組合様には後援をして頂いております。厚くお礼を申し上げます。

展示予定資料目録



25 結城紬立涌更紗柄帯



12 結城紬刺子着物

着物

1	結城紬百亀甲細工着物	1 領
2	結城紬唐棧縞着物	1 領
3	結城紬経縞緋着物	1 領
4	結城紬縞羽織	1 領
5	結城紬十字緋男物着物	1 領
6	結城紬経双緋着物	1 領
7	結城紬十字緋着物	1 領
8	結城紬経緯双緋横段柄着物	1 領
9	結城紬裂地縫合せ袷襦袢	1 領
10	結城紬訪問着	1 領
11	結城紬後染付下げ	1 領
12	結城紬刺子着物	1 領
13	結城紬縮織亀甲格子飛緋着物	1 領

反物

14	結城紬二百十字緋男物反物	1 反
15	結城紬百六十亀甲緋男物反物	1 反
16	結城紬経立涌双緋反物	1 反
17	結城紬亀甲細工に後染め加工反物	1 反
18	結城紬双緋縞トンボ柄反物	1 反
19	結城紬井桁十字緋双入り反物	1 反
20	結城紬亀甲十字井桁縞組合せ反物	1 反
21	結城紬百亀甲細工緋反物	1 反
22	結城紬経緯双緋細工反物	1 反
23	結城紬亀甲双緋細工更紗柄反物	1 反
24	結城紬亀甲十字双緋東照宮天井柄反物	1 反
25	結城紬立涌更紗柄帯	1 反
26	結城紬横双帯	1 反

縞帳等

27	縞帳	3 冊
28	意匠図案	4 枚
29	設計図案	4 枚

道具類

30	ツクシ	1
31	オボケ	1
32	糸車	1
33	トンボ	1
34	揚げ杵	1
35	経て杵	1
36	シャクゴ	10
37	地機	1 台
38	工程絵画	5 枚

最近の博物館

博物館実習総括

平成5年度の博物館実習を、7月29日(木)から8月3日(火)まで5日間にわたり実施した。

昨年度の反省に鑑み、今年度は、別掲のような博物館実習受入の基準を設け、申込を受付けた。

そのため、幸か不幸か、立命館大学2名、愛知大学2名、愛知学院大学、愛知大学2名、日本福祉大学各1名、総数6名の応募があり、うち1名については基準に合致しないため受講を非とし、5名の受講生で実施した。

別図のような日程に従い、学習を進めた。

2日目午後は、愛知県埋蔵文化財センター葉栗事務所のご協力により、発掘作業の実際を体験するはずであったが、雨というあいにくの天候で、室内での土器洗浄と、土器への注記という作業を経験するにとどまった。

また4日目の実技指導補助は、当博物館主催で実施した「弥生機で織ってみよう」という講座の中で、参加者である子どもたちと実際に肌でふれ合いながら学習を進めるといもので、実習受講者が将来学芸員として活躍していく場において、この体験が生きてくるものと思われる。また、その合い間に、短時間ではあるが、お抹茶のいただき方もひととおり体験してもらうことができた。

以上の様に、良く言えば多彩な、悪く言えば余りまとまりの無い博物館実習となってしまったが、受講生は5名ともそれぞれ熱心に実習に取り組んでいた。そして最終の反省会においても、それぞれの内容について否定的な意見は聞かれず、かえってもっと別のこともやってみたい、発掘調査にも参加してみたかった、という意見が聞かれた。

本年度の反省を踏まえて、来年度以降の課題として、

- 1、基準の中の、実習生の専攻の限定はやめ、当館が歴史系博物館であることを明記するにとどめ、受講希望者の判断に任せる。
 - 2、雨天の場合等も考慮して柔軟な日程とする。
 - 3、日曜日の実施は避けたほうが望ましいと思われる。
 - 4、民俗資料関係の講義も取り入れる。
- などの点が挙げられると思う。

(土本 典生)



平成5年度「博物館実習」受け入れ基準

- 1、実習生の住所地・帰省先は、一宮市内であること
(「尾張西部広域行政圏協議会」を構成する他の2市3町、尾西市・稲沢市・木曾川町・祖父江町・平和町はこれに準じて扱うものとする)。
- 1、実習生の専攻は、日本の歴史諸科学であること。
- 1、一大学からの実習生の受け入れは、最大限2名、全大学で延べ8名までとする。
- 1、実習期間中の遅刻・欠席は、一切認めない。
- 1、謝礼の類は一切受け取らない。
- 1、実習生の応募者は、履歴書とレポート(博物館実習を希望する理由について、400字詰め原稿用紙5枚)を提出。
- 1、平成5年度の受付期間は、5月末日までとする。
- 1、合否の結果は、6月10日までに連絡する。
- 1、実習期間は、7月29日(木)から8月3日(火)までとする。ただし8月2日(月)は休日とする。

博物館実習計画表

日 時	9:30~ 10:40	10:50~ 12:00	13:00~ 15:00
7月 29日 (木)	あいさつ 博物館の業務 —管理・運営—	常設展の構成	来館者受付・案内/参考図書の間 覧・整理
7月 30日 (金)	考古資料の整理と収蔵		発掘調査の実際
7月 31日 (土)	特別・企画展示準備の進め方		博物館における普 及活動
8月 1日 (日)	普及活動の実際(実技指導補助) 博物館講座「弥生機で織ってみよう」		
8月 3日 (火)	歴史・美術資料の整理		実習総括

民俗探訪(3)

川と暮らす村—北方町大日—

1. 北方町の位置

北方町は、一宮市の最北部、木曾川左岸に位置し、昭和30年に一宮市に合併される以前は葉栗郡北方村であった。もともと大日・狐塚・中屋敷・本郷・泉屋・畑下・宝江の集落を含む北方が北方村であったが、明治15年に葉栗郡中島村を、明治39年に葉栗郡黒田町に属していた曾根を合併して北方村となった(図1)。

北方村は交通の要衝、物資流通の中継地として重要な位置を占めてきた。北方では万治2年(1659)より番所が建てられ、川並役人が勤務するようになるが、寛文年間の代官制度改革の中でも、対岸の円城寺とともに代官所支配との兼務がなされることなく、川並奉行として任命され続けた(天明元年に北方代官所となり、川並奉行を包括)。このことは、木曾川筋の水利支配の重要性を物語っていると

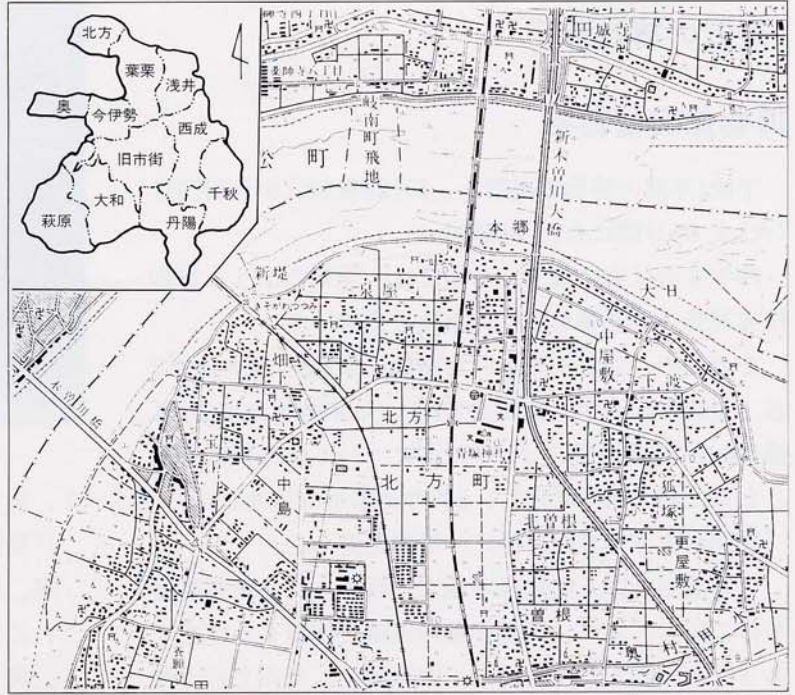


図1 北方町の位置(国土地理院発行の25,000分の1の地図を70%に縮小)

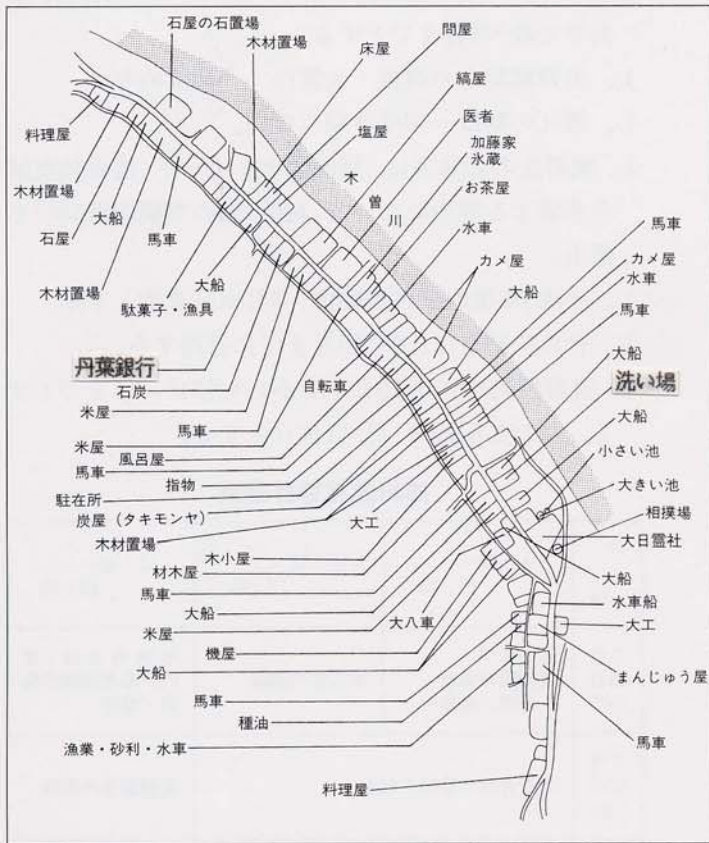


図2 戦前の大日のようす

紫紺の5色が使われる。唄には「雨乞いかけ唄」「豊年踊りの唄」「ひねり踊り唄」がある。また、別唄に「加藤のお庭へおどりきて お店のありさまがむれば 大福帳や五大刀 そろばん 金升 かざりたて いく万代をうちつづき 黄金の山をつみたてて 光りかがやくくらぐらは 米麦俵 すさまじく 積みならべたるみごとさや よ、万さいといのりける」という歌詞があり、往時がしのばれる。現在では、大日に保存会がつけられ活動を続けているが、従来は泉屋にも伝承されていたようである。この雨乞いの創始は不明であるが、細野要斎の『律の滴 感興漫筆』の巻25に、万延元年7月15日(1860)に踊られた様子が絵とともに書かれている(写真1)。これに加え、加藤あさゑ氏宅に残っていた文書にも、「天保14年の干ばつとき、8月4日より雨乞いをかけ、17日に少し雨が降り、18日に御礼踊りをして、21日には雨が降った」という内容の記録が残っている。この加藤家文書は、堤防北にあった加藤家で、建設時の堤防改修の際に発見されたもので、これを当時北方小学校長であった浅井哲夫氏が調査し、世に知らしめたものである。現在でも大切に保管され、渡船関係の資料、神社の修復などにかかわる資料をはじめ、加藤家の婚礼の覚といった当時の大日の習俗を知る上でも非常に貴重な資料が含まれている。

える。

しかし、戦後、物資運搬のトラック輸送などへの転換、ダム・堰の建設によって船や筏の往来が行なわれなくなり、さらには堤防の改修工事で、水運とともに近世に栄えた北方の往時の姿は、一部を残して消えつつあるのが現状である。

そこで、今回は、昭和40年代の堤防改修工事によって堤防北側の家々が移転してしまった、北方で最も規模が大きい集落であった大日の姿に触れてみたいと思う。

2. 御囲堤に並ぶ家々

大日の集落は御囲堤の両側に広がり、船頭や漁師、水車船、問屋、運送業(馬車・大八車)など川にかかわる仕事をする人々が多く暮らしていた。伊藤武氏のお話をもとに、戦前にはどんな町並みであったかを、概略であるが図化してみた(図2)。問屋や石屋、炭屋(タキモン屋)、カメ屋(常滑焼など)などから、物資の集積地であったことがわかる。

3. 「ばしょう踊」と加藤家文書

北方には、「ばしょう踊」と呼ばれる雨乞踊りが伝承されている。これは、風流踊りの中の太鼓踊りの系譜をひくもので、対岸の円城寺より伝わったものと考えられる。踊りは4人の武将と8人の鉦擦りで構成され、唄い手、笛吹きがこれに加わる。武将は高さ3mの竹を12に割き、1年の日数分の色紙を付け、中央に御幣を立てた指物状のものを背負う(写真1・2)。色紙は、雨乞祈願のときは白、御礼のときは緑、金、赤、銀、

写真1

「北方村堤上喜雨歎舞図」
(細野要齋筆「感興漫筆
巻25」より、
資料所蔵・写真提供：
神宮文庫)



4. 大日靈神社と「おばば踊り」

大日の集落の東には、氏神様である大日靈神社がある。祭神は、上流より流されてきたという伝承がある。この祭神が女性であるため、氏子祭りの際、暴れることはよくないとし、オマント(馬の塔)をしなかった。そこで、大日では「おばば踊り」(「おばば」は、岐阜県中濃から東濃地方にかけての酒宴歌)と相撲を盛んに行なったのである。この「おばば踊り」は新堤・本郷・大日で4月10日に行なわれた。それぞれの氏神様から、梯子を使って3つの太鼓を御輿のように組み、「お婆ば 何処行きやる なアーなアーな」で始まる唄を唄いながら集落を練り歩く。これは年行司が取り仕切るが、実際は若い衆が中心となっていた。相撲も同様で、神社の東には「スモバ」(相撲場)があった。

5. 大船と物資運搬

図2を見ると、大日の人々の職業に、大船の船頭が多いことがわかる。大船は、笠松に30艘、北方に20艘ほどあった。しかし、伊勢湾台風の際にそのほとんどが鍋田川へ沈められ、現在北方には一艘も残っていない。

東本郷の山口武衛氏(M41生まれ)と木村圭佑氏(S4生まれ)は、数少ない大船の船頭で、お話をうかがうことができた。大船は、大正末に発動機をつけるまで手漕ぎで物資を運搬した。主に運んだものは石で、「グリ」(川島付近くで採れる小さい石)と「ウナ石」(げんこつぐらいの大きさで、必ず丸い)などである。特に興味深いのはウナ石で、これはウナギを獲るからこの名がついているのである。ウナ石は、木曾川から桑名・四日市方面へ運ばれ、ウナギのイシクラ漁に使われた。この際、船頭は直接漁師と取り引きした(戦前に船組合ができた)。

この他にも名古屋・常滑にも出かけた。名古屋までの便で、1カ月に2回が普通であった。常滑には常滑焼を積みに行く。これは運賃が高かったが、特殊で、行く船頭は決まっていた。船で出かけるときには、米、味噌、たまり、水、野菜をヘサキにある一畳ほどの「寝床」に入れておく。寝床にはコンロと水ガメ、米櫃が置かれている。普通は一人で乗り、ツレブネ4艘ぐらいで出かけた。

現在、大船は大垣市船町の水門川に1艘残っている(写真3)。



写真3 大船(大垣市船町)

6. 漁業

戦前には、大日にも、多くの魚種を捕獲する専門漁師がいた。豊田耕吉氏の祖父である豊田仙勝氏は船大工でもあり、漁師でもあった。豊田耕吉氏も若いころは漁に出ていた。

今では、馬飼頭首工を上ることができず、見るものがなくなった川マス(降海型アマゴ)のトロ流網漁(写真4)は、奥町付近で船に寝泊まりしながら行なった。この他にも、マスのイシクラ漁、ニゴイのカケバリ、大綱(地曳網)、ウナギのナガノ(延縄、スッポン・ナマズも捕獲)、ウナギウゲ、寒バエを獲るハエアミ、アユのオトリ漁(友釣りと同様、アユのオス・メスをつける)、チンカン網(石でおどして捕獲)など多くの漁が行なわれていた。

7. おわりに

今回は大日を中心に北方の文化の一部を簡単に紹介したが、北方町にはまだ多くの歴史と文化が眠っている。今後、今まで書かれてこなかった北方の人々の暮らしー川と上手に暮らしていたころの暮らしーを明らかにしていきたい。

最後に、お話を聞かせて下さった皆さんに深謝の意を表する次第である。
(田中禎子)

参考文献

- 浅井哲夫 『大日加藤あさゑ文書について』
- 服部松太郎 『北方村史稿』
- 一宮市役所 『新編一宮市史 本文編』 1977
- 北方尋常高等小学校 『郷土北方の実態調』 1934



写真4 川マスのトロ流網漁
(長良川 大橋亮一・修氏)

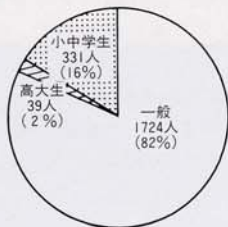


写真2 お婆ば踊り

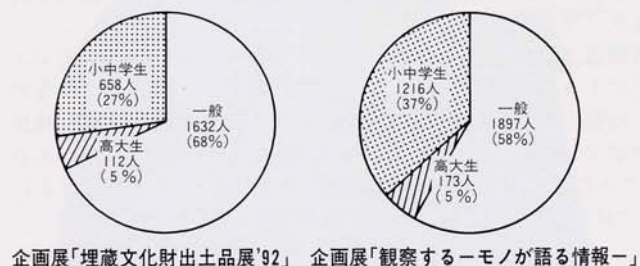
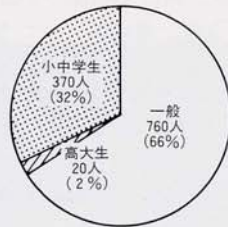
【ご来館有難うございました(5.1.5~8.31)】

名古屋歴史散策の会・稲沢小中学校PTA連合会・ともしび会・野口老社会・中部中学校・一宮市青少年センター・経済部農務課・大和南小学校6年生・稲沢1団・5団カブスカウト・武相文化協会・上次子ども会・東邦ガス(株)瀬戸サービスセンター・大和東小学校6年生・大和西小学校6年生・一宮文化服装専門学校・南高井子供会・共助組合中部協議会・愛知県都市国民年金協議会・一宮市女子教員研修会・中京大学考古学研究会・愛知淑徳学園・一宮第4団カブスカウト・浅井中学校1年生・企画課施設めぐり・尾張草文会・西区郷土史跡研究会・県下六市収税部門課長会議・鶴の会・稲沢市立西小学校・稲沢市立国分小学校2年生・都市景観形成基本計画策定委員会・名古屋南モラロジー事務所・師勝町社会福祉協議会・一宮高等技術専門学校稲沢校舎・柚木町子供会・磐田母子福祉会・(株)三輪設計事務所・國學院大学博物館実習・名古屋市博物館・一宮市社会福祉協議会浅井支会・小牧市親子文化財教室

【展覧会開催中の入館者数】



企画展「漢詩人・森春濤の遺墨」 「手つむぎ染め織り展」



企画展「埋蔵文化財出土品展'92」 企画展「観察するーモノが語る情報ー」

2/27~3/28 入館者数 2,094人/26日

「手つむぎ染め織り展」

4/4~4/18 入館者数 1,150人/13日

企画展「埋蔵文化財出土品展'92」

4/24~5/30 入館者数 2,402人/31日

企画展「観察するーモノが語る情報ー」

7/17~8/31 入館者数 3,286人/39日

【博物館日誌(抄)】(5.1.5~8.31)

- 5.2.7 島文楽公演
- 5.2.14 博物館講座「一宮の歴史を語る」
第1回「語り継ぎ、言い継ぎ行かん」
講師 東海学園女子短期大学教授
前一宮市博物館長 岩野 見司氏
- 5.2.21 博物館講座「一宮の歴史を語る」
第2回「一宮近代のあけぼの」
講師 愛知県立大学学長 塩澤 君夫氏
- 5.2.28 博物館講座「一宮の歴史を語る」
第3回「尾張藩と村々」
講師 国立歴史民俗博物館名誉教授
塚本 学氏
- 5.2.27~3.28 企画展「漢詩人・森春濤の遺墨」
- 5.3.14 講演会「森春濤と尾陽不休社」
講師 南山大学教授 山本和義氏
- 5.3.24 文化財めぐり
- 5.4.4~4.18 「手つむぎ染め織り展」
- 5.4.11 講演会「草木染め10問答」
講師 愛知県立起工業高等学校教諭
渡辺 幸雄氏
- 5.4.24~5.30 企画展「埋蔵文化財出土品展'92」
- 5.5.9 発掘調査報告会
- 5.5.23 講演会「米づくりのはじまるころ
ー一宮市馬見塚遺跡の発掘調査ー」
講師 国立歴史民俗博物館助手
設楽 博己氏
- 5.7.17~8.31 企画展「観察する
ーモノが語る情報ー」
- 5.8.1 博物館講座「弥生機で織ってみよう」

編集後記

博物館では、平成3年度から、歴史をはじめて学習する小学校3年生のために、暮らしの道具を展示しています。先年は、粗大ゴミ収集日にゴミの中から冷蔵庫などを採集し、昔の道具と比較して展示しましたが、今年はどうしようかと悩む今日このごろです。(T)

一宮市博物館だより 第16号

平成5年10月15日

編集・発行 一宮市博物館

〒491 一宮市大和町妙興寺2390番地

TEL 0586-46-3215

FAX 0586-46-3216